九九三年一二月まで九九三年 一 月より

班 硏 究

資料と方法』として刊行の豫定である。 究の成果は一九九四年三月の論文集『中國語史の 研究班は、本年三月を以て終了した。標記のテーマ 中國語史の資料と方法 に基づいて報告され、討論された三年閒の共同研 一九九〇年四月から三ヵ年の豫定で始まった本 班長

中國語音韻史の研究 の音韻學書の提要の作成を目的とする。今年度は、 通じて、明清の音韻史を辿ろうとするものである。 韻學關係の書物を取り上げ、序跋や凡例の會讀を 最終的には、『小學考』の補編ともいらべき明清 田憲幸擔當)の序拔、凡例を讀了した。以後の會 『洪武正韻』(佐々木猛擔當)、『正音通俗表』(岩 今年度より五カ年の計畫で始まった本研究班 一般の書目には著錄されることの稀な明清の 班長 高田 時雄

郞)、李氏音鑑(森賀一惠)、潮聲十五音(吉川雅之)。 昌司)、切韻聲原(佐藤晴彥)、山門新語(木田章 等韻一得 (矢放昭文)、書文音義便考私編 (平田 六朝美術の研究 義)、音韻日月燈(岡島昭浩)、韻學集成(淺原達 讀豫定資料および擔當者は以下のとおり。 西儒耳目資(高田時雄)、五方元音(木津祐子)、 九九〇年四月から五年の計畫で始まった本研 班長 曾布川 寬

> 擔當)、『梁武帝與陶隱居論書啓』(下野健兒擔當) た。また併せて造像記と藝術論の會讀を行い、造 々専門分野における以下のような研究發表を行っ ことにする。今年は班員及び招請研究者による各 書論や畫論などの藝術論を三本の柱に取り上げる 法としては出土文物、石窟寺院などの佛教美術、 な理解をめざそうとするものである。具體的な方 代を扱い、この時代の美術全般についてより精確 究班は、六朝を中心に後漢、隋唐時代を含めた時 を取り上げた。 藝術論として裴孝源『貞觀公私畫史』(木島史雄 擔當)、寶山靈泉寺石窟造像記(大內文雄擔當)、 像記として甘肅省南石窟寺碑、崇顯寺碑(稻本泰牛

一月二五日 北響堂山石窟の源流

二月一五日 クメール佛教美術調査報告 禮京

四月一九日 二月二二日 インド美術調査報告 シカゴ・フィ 彫刻について ールド美術館所藏 松田誠一郎

四月二六日 六朝書畫における藝術の成立 稻本 泰生·山名 伸生

五月一七日 アジャンター第十七窟の五趣生 死輪圖について 定金 計次 曾布川 寬

六月一四日

六朝金銅佛の同笵について

六月二八日

六月二六日

北朝鮮の高句麗壁畫古墳調査報

秀雄・永島暉臣愼

河北磁縣地區の北齊陵墓壁書

一〇月 一〇月一八日 一月 日 四日 訪中調查報告 北齊校書圖について 歴代名畫記から圖畫見聞誌へ 松田誠一郎・山名 藤岡 古田

一一月二九日 一一月一五日 高句麗古墳壁畫の構成とその意 六朝藝術論における氣の位置 宇佐美文理

河野

叉から陀歴まで)、春田晴郎 (烏萇から弗樓沙ま 参照して

擔るべき現代語譯を作成する。あわせ これらの諸譯を照合し、また『水經注』の記事を 五)をテキストにとりあげ、その注を讀みつつ、 るけれども、いずれも out of date である。當班 佛教事情を活寫している。一九世紀の佛譯注一例、 薩羅舍衞國から佛般泥洹處まで)、中谷英明 で)、小野浩 (那竭から沙祇大國まで)、入澤崇 (拘 注説明まで)、森安孝夫(于闐まで)、吉田豐 の會讀分擔は以下のとおり。高田時雄(序から校 美術などの多角視點をもって檢討する。班員とそ 班員の專門分野である歷史、言語、宗教、考古、 てその内容である五世紀の中央アジアとインドを は章巽『法顯傳校注』(上海古籍出版社、一九八 法顯傳研究 二〇世紀初めの英譯注三例、日本語譯注二例があ **法顯の行歷記は、當時の中央アジア、インドの** 班長 桑山

前近代中國の法制 所を終了し、中谷分擔の途中まで檢討した。 の傳記)、榎本文雄(經錄等)。本年は入澤分擔箇 海東還)、船山徹(高層傳中の法顯、 ら多摩梨帝まで)、井狩彌介(師子國)、 舍離から荊沙王舊城まで)、武内紹人 (伽耶城か 班長 梅原 智嚴、 稻葉穰(浮

めている敦煌文獻の法律關係の資料を使用してい は、新出の敦煌漢簡と、本所が傳統的に研究を進 のもとに、先秦時代から清代に至るまで幅廣く多 樣な問題を追及している。共通のテクストとして 比較してどんな特性を持っていたかといった關心 形成され展開していったか、また他の歴史世界と 前近代中國の歷史の中で「法律」がどのように

行して、班員による次のような研究報告が行われ 關係する部分を讀み終わり、占いをつかさどる大 よび鄭玄の注に譯注を附けた。本年度は、音樂に 中國古代禮制研究 卜の職まで讀み進んだ。こうした譯注の仕事と並 「周禮」春官篇を唐の賈公彦の疏で讀み、 最終年度を迎えた本研究は、從來に引き續き、 小南 經文お 郎

一月二三日 月二六日 樂論について ついて 「五經異義」に見える周禮說に 田中麻紗巳 高康

五月二五日 周禮のフランス語譯をめぐって 一惠

皮日休の「補周禮九夏系文」に めぐって 達郎

一月三〇日 九月二八日 六月二二日 甲骨文第五期の五祀周祭祀譜を ついて 漢・六朝の靈座をめぐる墓葬形

> その部分の譯注作業を、將來も繼讀したいと考え 禮制、禮學、祭祀儀禮などをめぐる論文集を、來 ている。また、班員の研究報告に基づき、中國の や巫祝に關わる部分を讀み殘すことになったが、 今囘の研究では、「周禮」春官篇後半の、占い

明末清初の社會と文化 如くである。 度から論議が深められた。報告のテーマは以下の 國家財政・地域社會・民衆の意識など、様々な角 スティックな展開の中で、權力構造・政治過程・ を中心に研究會を運營した。王朝交替というドラ 四カ年計畫で始まった研究班も第三年度に入 折り返し點に達したので、今年度は研究報告 班長 小野

一月一九日 明末清初の出版業界

月二六日 國會圖書館藏太湖廳檔案に見る 訴訟と裁判の實際 夫馬 進 進

月 二日 萬曆援朝に關する諸問題 岡野 昌子

二月

九日

明末國家財政の一面

一月

九日

四月二〇日 四月二七日 崇禎七年・安慶府桐城縣の汪國 天啓初年の政局 華・黃文鼎の亂について 小野 谷口規矩雄 和子

五月一一日 關于明末農民戰爭的兩箇問題 炳文

賞

五月一八日 明代後半期の上奏文處理機構

五月二五日 明代後期廣州市的轉型與珠江三

六月

年度中に出版する豫定である。

一〇月 〇月一二日 五日 崇禎十七年の「從逆」問題と江 徭役と財政のあいだ

〇月一九日 〇月二六日 都市廣州とカントン・システム 十二一十六世紀東アジアにおけ る銅錢の流布 岸本 大田由紀夫 三緒

清代江南民衆の水路舟運

一一月一六日 批評『柳如是別傳』林 中國明清小說 中日文化交流史から見た讀本と 樹果 紅

一月三〇日 明清江南の總管信仰 濱島

くに生活科學・技術の關連分野を主たる對象とし の豫定で、中國の傳統的技術の特質について、と 中國技術史の研究 本研究班は、一九九一年四月から向こう五箇年 田中 敦俊 淡

六月 日日 明末清初江南之醫生與社會 顯恩

六月一五日 八日 なかの中國と東アジア 十五世紀中期「歐亞大不況」の 「衝」考 大澤 顯浩 元玲

清代の地方衙と政書 W. S. Atwell

六月二九日 六月二二日

清代前半期的商品流通

順治時代政治史試論

俊仁

九月二八日

陽子

532

てとりあげながら、検討を加えてゆこうとするもてとりあげながら、検討を加えてゆこうとするもてとりあげながら、検討を加えてゆこうとするもてとりあげながら、検討を加えてゆこうとするもてとりあげながら、検討を加えてゆこうとするもの構成をとり、前者は元・王禛の『農書』、後者に梁啓雄輯『哲匠錄』疊山篇をそれぞれテキストに選び、會讀・譯注作成をすすめてゆく。標記の期たる。また、それと並行して、技術史の諸分野にわる。また、それと並行して、技術史の諸分野にわる。また、それと並行して、技術史全般に關わる分のである。當面、研究會は技術史全般に關わる分のである。當面、研究會まだして、技術史全般に關わる分のである。當面、研究會まだして、技術史全般に関わる分のである。當面、研究會は技術史全般に関わる分のである。

二月一六日 比較造園史上におけるいくつから怪樹― 小林 清市二月 二日 詩注のなかの動物觀―虎豹を食

二月二三日 江南園林藝術原理 楊 鴻勛 で類似の事象について

四月二〇日 南朝の建康について 龍居竹之介 二日 日本庭園にみる華國趣味の影響

二月一七日

三老趙寬碑と漢代の三老

――スライド併映― 坂出 祥伸四月二七日 臺灣客家民宅風水の調査の報告 外村 中

六月二九日 雲南少數民俗の暮らしと生産用ついて 曾布川 寛 一日 漢代畫像石の建築・生活表現に

六日 庭園と權力者たち (漢)

武

六月三〇日

「新出」の閩國王審知墓誌につ

二月一九日

(―スライド併映

七月

九月二八日 Chinese Paleo-Astronomical Records and the Study of Variation of the Earth's Rotation

書の成立と流布について一二月一四日(東アジアにおける甘薯栽培技術・ 華 延本

た。九三年の發表題目は以下の通り。會で出土文物に關する班員の研究發表が行われ事研究では昨年に引き續き、隔週水曜日の研究秦漢隋唐の文物資料 班長 礪波 護

四月二一日 唐代の過所關係案卷と勾檢制 鷹取 祐司

六月二日 從劉該動向看士族遷移五月一九日 六朝墓出土錢幣 中村 圭爾礪波 護

ぐって 荒牧 典俊六月一六日 中國における「佛教初傳」をめてギリスの中國學 T. Barrett

二月

五日

O. Todd をめぐって―華洋義賑

全般について、總合的に檢討してきた本班は、今期中國文人の生活 について 船山 徹一二月 八日 生七齋と十王經 小南 一郎一郎 大の生活 班長 荒井 健 一月一〇月 劉宋時代における菩薩戒の受容 一月一〇月一三日 高麗王言考 矢木 毅

各分野の研究報告および討議を行い、九三年三月

に研究終了した。成果は論文集「中華文人の生活」

一九二〇年代の中國
 一九二〇年代の中國
 一九二〇年代の中國
 一九二〇年代の中國
 班長 來閒 直樹である。最終年度にあたる本なおそうとしたものである。最終年度にあたる本なおそうとしたものである。最終年度にあたる本年の當該時期には、以下の研究報告を行った。五年の當該時期には、以下の研究報告を行った。五年の當該時期には、以下の研究報告を行った。五年間の蓄積をもとに、目下各班員が論文の執筆にあたっており、近くその研究成果を發表することあたっており、近くその研究成果を發表することなおろう。

一九二〇年代の「國粹」(その會から全國經濟委員會へ―

三) ―「唯情哲學」の形成に於

梁啓超の研究―その日本を媒介とした西洋近代認 ける『革命哲學』の位置―

をはらい、傳統的社會に育ったかれの認識がいか として依據した同時代の日本からうけた影響に意 本年の報告者、 告を検討することを中心として研究班をすすめた。 はかれとその經學論、法政論、經濟論、宗教論、 て檢討していくことが必要となるだろう。本年度 割に主眼をおいて研究しようとするものである。そ 識について 文明論、學術論等の變遷に関して、各班員の研究報 に展開したのかを、多面的かつ世界的視座にたっ のさい、かれが近代西洋認識の過程で主たる媒介 洋學術文化の攝取に多大な貢獻をした梁啓超の役 研究」は、中國の近代世界認識形成、および近代西 本年度より三ヵ年の豫定で開始した「梁啓超の およびその題目は以下のとおりで 班長 狭閒 直樹

五月 四月二三日 七日 梁啓超と王國維 始めるにあたって 「梁啓超の研究」共同研究班を 狹閒 直樹 陵一

五月二一日 新儒家としての梁啓超

六月 四日 政思想 「黑血革命家」梁啓超と日本法 山室 弘行 信

六月一八日

梁啓超と近代の超克

七月 二日 日 歐淤心影錄をめぐって―梁啓超 梁啓超と法制 梁啓超と附會説 小野 村尾 中村 和子 哲夫 進

と「文明」

石川

順浩

一〇月一五日 變法派と西洋科學

中國近代の都市と農村 一二月一〇日 一一月一九日 一月一二日 梁啓超の經學(一) 梁啓超と朝鮮 梁啓超と宗教問題 を中心として一 末岡 森 — 今文古文 M. Bastic 悅子

の並進過程ととらえてみてはとの提案)をもりこ 化を沿海地域の都市化と内陸地域の「農村化」と 題を論じて有益な示唆を與えられたのをはじめ、 門の立場から、明淸から近代にいたる都市化の問 國からの四人のゲストスピーカーがそれぞれの專 階として、各班員の個人研究を所與のテーマに卽 んだ報告も出現している。 すでに課題の核心にせまる問題提起(中國の近代 する視座の確立をめざしている。目下は助走の段 都市と農村の關係を主軸にすえて、中國近代史を長 して整理しなおした報告が比較的多いものの、中 から現在にいたる中國社會の變動を巨視的に分析 いタイムスパンで縦斷的にとらえなおし、前近代 本年度から五年計畫でスタートした本研究は、

四月一六日 「中國近代の都市と農村」研究

班をスタートするにあたって

五月一四日 四月三〇日 中國文學にみられる都市と農村 「都市」の政黨から「農村」の 脩二

六月一一日 五月二八日 一九一九年のコレラ流行をめぐ 大都市知識人政黨としての初期 政黨へ 中國共產黨 江田 憲治

〇月二九日 梁啓超と生計學 時彦

森 時彦 一月 一〇月二二日 一〇月 二月 三日 一月二六日 八日 五日 層の動向 明清時期江南市鎭經濟的發展

中國の近代化と "農村化"

近世前期における政治的主要人物の居所と行動 中村 哲夫

史を考えていくためには、彼等のそれぞれの時點で り、それゆえにこの時期の政治史、さらには文化 的主要人物の人閒關係に即して展開するものであ こなかった中井家文書、永井家文書の年代を可能 研究では、まず政治史上價値の高い文書であるにも の居所と行動を解明する作業が不可缺である。本 かかわらず、年紀がないゆえに十分に利用されて 近世前期の政治過程は、機構・組織よりも政治 班長 譲治

六月二五日

長江下淤城市近代化的軌跡

七月 九月二四日 九日 孫文の「實業計畫」と中國近代 の都市と農村 張謇研究的再認識 一九二〇年代における總稅務司 狹閒 直樹 隆司 學熙

學文

國民黨集團における軍・政の分 日本人から見た上海 國民政府期の都市建設 西川 洋 眞子

舊奉天省城における地域有力者 澁谷 由里

一七——八世紀的中國城市

三年度中に發刋の豫定である。の居所と行動の解明にあたった。報告書は一九九役割を果たした人物を中心に二〇人について、そな限り確定するとともに、主に上方支配に重要な

版してこれまでの「東アジア」研究は、東アジーで、それぞれの社會・國家の自立化を對象とする一國史的研究とその比較という形で展開してきた。そのために、この地域の諸民族が「東アジア」世界における多面的な相關關係を規定しかつ規定されながら發展するという側面には十分な關心が構われてこなかったといえる。われわれは、近代「東アジア」において取り結ばれたこうした諸問題を總體としてとらえ、その起源と展開をあきらかにしたい。

々の参加を呼びかけたい。一年を經過したが、關心のある所内外おおくの方とりあえずは日本部全體の研究會として發足し

進められている。

進められている。

進められている。

東京紀事』の會讀部會も引き續き
を行う本報告部會と並行して、日本最初の「飜譯
を行う本報告部會と並行して、日本最初の「飜譯
を行う本報告部會と並行して、日本最初の「飜譯

近世・近代が對象の中心になっていることは事實だ力點をおいた報告が積み重ねられている。日本のからの脫出がどのように文學のテーマとなってゆからの脫出がどのように文學のテーマとなってゆからの脫出がどのように文學のテーマとなってゆか、そしてそれがいかに表現されてゆくかに、日常には立っていない。またあえて、意識的に、日常には立っているのは、ともに日常性から極い。

要のテーマの一つとなっている。などの地域における文學の轉換・變貌も報告の主が、東アジア、さらにロシア・フランス・ドイツ

また、本報告と會讀でそれぞれの報告書を作成また、本報告と會讀でそれぞれの報告書を作成というが必要であり、若干の日時を要することと的な檢討が必要であり、若干の日時を要することとのな検討が必要であり、若干の日時を要する。

「大東亞共榮園」の經濟 ・大東亞共榮園」の研究』の終了をうけ、 ・大東の山本班『「滿州國」の研究』の終了をうけ、 ・大東の山本班『「滿州國」の研究』の終了をうけ、 ・本語でを共同研究を行いたい。できれば、いず ・大東の上でもので ・本語でを共に分析對象をしばり、in-・な共同研究を行いたい。できれば、いず ・な共同研究を行いたい。できれば、いず ・はいます。 ・できれば、いず ・できれば、・できれば、いず ・できれば、・で

り、という問題に比重を置いている。さらにもう 轉換期における社會ならびに組織と個人との關わ 個人の傳記的研究をめざすものではない。むしろ 時閒的制約があるため、かならずしも對象とする 農、村役人、そして俠客、女性等々、多様・多彩 治家、志士、公家、大名、幕臣、學者、豪農、老 當することにしたが、當面對象とする人物は、 のか、有名、無名の群像の、ライフスタイルを明 な群像が選ばれた。この研究は、限られた史料と らかにすることを、この研究は第一の課題として いる。班員各自が、一人あるいは複數の人物を擔 轉換期における個人と組織 し、いかに生き、あるいは生きざるをえなかった つの問題は、まとめの段階での課題でもあるが、 歴史の轉換期において、個人がどのように生活 班長 佐々木 克 政

明治維新期が中心となる。関治維新期が中心となる。関心を加えることによって、その時代の社會のイメージと断面を、浮かび上がらせる事ができると考えており、この課題び上がらせる事ができると考えており、この課題が上がらせる事ができると考えており、この課題が上が、班員の研究領域と問題關心の關係から、主にが、班員の研究領域と問題關心の關係から、主に対している。

正向けて以下のようなスケジュールで研究發表おるのである。三年目にあたる今年は、報告書作成學問の領域とも關連づけながら模索しようとする。のである。三年目にあたる今年は、報告書作成とのである。三年目にあたる今年は、報告書作成に向けて以下のようなスケジュールで研究發表おに向けて以下のようなスケジュールで研究發表おに向けて以下のようなスケジュールで研究發表おに向けて以下のようなスケジュールで研究發表おに向けて以下のようなスケジュールで研究發表おに向けて以下のようなスケジュールで研究發表おに向けて以下のようなスケジュールで研究發表おいて、

株禮的暴力の研究

本研究班では過去三年間の討論を踏まえ、暴力現象を、(1)社會、字宙の再生に積極的に關與する現象を、(1)社會、字宙の再生に積極的に關與する場別、(供犧、宗教的苦行、火渡り)、(2)社會統制暴力(供犧、宗教的苦行、火渡り)、(2)社會統制暴力(供養、宗教的苦行、火渡り)、(2)社會統制暴力(共養、宗教的苦行、火渡り)、(2)社會統制暴力(共養、宗教的苦行、火渡り)、(2)社會統制暴力(共養、宗教的、(4)基本では總合人間學部の福井勝義中では過去三年間の討論を踏まえ、暴力を開かる。

どの問題が、基本的作業前提としての協調性の問た指示作用、意味連關性、社會行爲としての力な爲表象のレフェラントの階層性、自己言及を含め身體、音、言語などコミュニケーショナルな行コミュニケーションの自然誌 班長 谷 泰コミュニケーションの自然誌 班長 谷

料をまとめた資料集を刊行する豫定である。
解究班は、おもに社會的インターラクションの現場資料をもとに分析を行い、より適切な記述の言語を資料をもとに分析を行い、より適切な記述の言語をなような具體資料の檢討のほか、理論言語學、文のような具體資料の檢討のほか、理論言語學、文のような具體資料の檢討のほか、理論言語學、文のような具體資料の檢討のほか、理論言語學、文のような具體資料の檢討のほか、理論言語學、文のような具體資料を表とめた資料集を刊行する豫定である。

中葉から一九二〇年代までを視野に收める。中葉から一九二〇年代までを視野に收める。その際、音樂・美術・演劇などの諸藝術との關わり、政治や社會の變に何かを問うことから始める。その際、音樂・美で、大変とのような展開を遂げたかを問う。特に二十世紀初頭のアヴァン・ギャルド藝術を、象徽主義がとつの展開、結實あるいは變貌として見とどけたい。したがって時代區分としては、十九世紀から一九二〇年代までを視野に收める。

口頭發表がなされた。象徴主義との接點を模索することに重點を置いたと基礎がためとをめざして、各班員の個人研究とと基礎がためとをめざして、各班員の個人研究と

工業化以前の諸社會での「職業」がもっていたステイタスと職業 班長 前川 和也

知識と秩序 Ⅱ 班長 阪上 孝職の成立が、中心課題として、報告・討論された。制度の搖らぎと職業、さまざまな分野での「専門」がどのような社會的威信を保持していたか、身分がどのような社會的威信を保持していたか、身分

一九九〇年に發足した本研究班は、近代社會の一九九〇年に發足した本研究班は、近代社會ので得られた論點、知見を總括する作業を進めている。

「法(ダルマ)」は、インド文明の構造を理解古典インドの法と社會 班長 井狩 彌介しる

「法(ダルマ)」は、インド文明の構造を理解では、ケルマ)の観念は、古典インドはもとより現代に至るまで、インド文明の社會秩序と文化規範のにて、インドゥー社会の行為準則集として成立した古典インドは、カルンに立動を打ち出している。具體的には、「ヤージュニャが、法典を狹義の法律集成として扱うのではなく、が、法典を狹義の法律集成として扱うのではなく、が、法典を狹義の法律集成として扱うのではなく、が、法典を狹義の法律集成として扱うのではなく、が、法典を狹義の法律集成として扱うのではなく、が、法典を狹義の法律集成として扱うのではなく、が、法典を狹義の法律集成として扱うのではなく、が、法典を狹義の法律集成として扱うのではなく、いわばヒンドゥー社の人間を表すとは、インド文明の構造を理解する。本法典の成立過程と内容の歴史的位置である。本年はでは、インド文明の構造を理解では、インド文明の構造を理解では、インド文明の構造を理解では、インド文明の構造を理解が、大学の関係を対する事を行いつつ、本法典の形成期に無数のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学の表情が

三に相當する部分の檢討を終えている。三に相當する部分の檢討を終えている。

ボル・テスト。 正義の法的諸體系、③正義の法的諸體系のサバイ 正義の法的諸體系、③正義の觀念論的諸體系を研 援用しながら次の三つの順序で正義論の諸體系を研 援用しながら次の三つの順序で正義論の諸體系を研 接用しながら次の三つの順序で正義論の諸體系を研 接用しながら次の三つの順序で正義論の諸體系を研 を研究班は義務論理學を協力な武器として

本研究班は以上三項目のうち、②を中心テーマをするものである。すなわち各種質定法がいかなる正義をどの程度表現しているのか、また現行のる正義をどの程度表現しているのか、また現行のは、どのような實定法を新たに追加すべきかが、ば、どのような實定法を新たに追加すべきかが、は、ごのような實定法を新たに追加すべきかが、は、ごのような實定法を新たに追加すべきかが、は、ごのような實定法を新たに追加すべきかが、が、これでは、宗教的、哲學的、ユートピア的といったさには、宗教的、哲學的、ユートピア的といったさには、宗教的、哲學的、ユートピア的といったさには、宗教的、哲學的、コートピア的といったさいは、近のテーマである。した。

大文學のアナトミー
 大文學のアナトミー
 大文學の専門化と細分化が進んだ現在は、人文學は一つの轉機に立っている。この研究會は、この知的な好機をふまえながら、人文學の方法論を中心とする新しいバラダイムの構築をめざしてい中心とする新しいバラダイムの構築をめざしていか心とする新しいバラダイムの構築をめざしていかが出た。
 大文學のアナトミー
 班長 山田 慶兒人文學のアナトミー

唯識思想研究

東方部 個 作成にむけ、班員各自の論文要旨發表を始めてい 學のフロンティアに立つ諸問題をソフトウェアと である。 共同研究の成果を論文集として近く刊行する豫定 る。相互の討論をさらに重ねたうえで、三年閒の た。最終年度にあたる本年の後半からは、報告書 ハードウェアの兩面を見据えながら檢證してき 先秦時代の金文 東林黨の研究 宋代の官僚制度 イスラーム勢力進出期のアフガニスタン 漢唐閒における天文學と文化 中國古代中世の法制 中國建築の様式・技法・空閒 中國美術の様式と意味 中國中世土地所有制の研究 原始佛教起源論 古代中國における說話傳承の研究 インド亞大陸北西地方の歷史考古學研究 五四時期中國社會主義の研究 敦煌文書の言語史的研究 近代中國の綿紡織業 六朝道教思想研究 隋唐政治社會史研究 六朝隋唐精神史 人研 究 富谷 田中 曾布川 邦夫 和子 哲也 典俊 忠夫 晉司 郎 護

> 日本部 高麗及び朝鮮官僚制の研究 中國佛教美術の研究 中國の傳統的品詞觀 明清時代の官僚制度 宋元道教研究 唐宋時代の士人 中國共產主義運動の歴史と思想 六朝時代の學術史の研究 石川 中砂 稻本 森賀 木島 谷井 明德 史雄 陽子 恵

日本ファシズムの研究 古屋 哲夫

文化史および文明史としての國民國家の形成 植民地經濟の研究 廢藩置縣の研究 日本近代文化史の研究 飛鳥井雅道

佐々木 克 山本 有造

日本近世の地域社會の研究 近代朝鮮の政治と社會 政治文化の中の社會理論 日本近世社會における政治権力 水野 俊夫 信 讓治

落合 弘樹

西洋論理思想史 社會的相互行爲の解讀

思想と制度

西洋部

貨幣の研究

文學と近代 士族の研究

シュメール行政經濟文書の研究 群衆現象の社會學 フランス散文詩の研究 インド世界の儀禮の研究

南アジアにおける宗教と社會 田中 富永

文學理論の研究

井狩 前川 阪上 谷 宇佐美 齊 彌介 和也

ドイツ中世のエトノス フレデリック ハリソンとイギリス實證主義 デカダンス文學における自己矛盾の研究 音聲形式の記述と分析

藤田

啓司 隆則

後期ヴェーダ文獻の成立史研究―ブラーフマナ

からウバニシャッドへー

フランクフルト學派の政治思想 佐々木博光 光永 雅明

東方學報執筆者豫備發表

東方部研究會

二月二四日

小南一郎

漢代の祖靈觀念―出

中砂明德 劉後村と南宋士人社 土文物を中心として

三月一〇日 稻葉 ガズナ朝の王都ガズ ナについて

桑山正進 ストゥーパの車輪狀 構造とその意義

東方學報第六五册合評會 一一月二四日 小南論文 稻本泰平

曾布川論文 桑山論文 矢木

事 業 槪 要

一二月

八日

七月九日 夏期公開講座―繪とうた…文化の現場を讀む―

聖歌から聖音へ―古代インド宗教歌詠の思想性 歌い手たちの變貌―能の「コロス」とその意味 藤田

537

詩のことば―リュートからイメージへ― 宇佐美

漢代畫像石墓の世界

佛像の出現―それは大乘經典にかかわらないか―

天皇の圖像―綿繪から御眞影へ―

佐々木

克

典俊

開所記念公開講演會 一月一一日

貨幣の自生と自壊

論理學と私 木札に書かれた中國古代

> 富谷 安冨 正男

至 步

九九三年度漢籍擔當職員講演會(漢籍電算處理)

一日(一〇月四日)

東洋學文獻類目の編纂とフォーマット(講義) 人文科學とデータベース(講演) 大型計算機センター教授 聰

澄子

TEXによる東洋學文獻類目の出力(講義) 大型計算機センター技官 河野 典

AIと情報檢索(講義)

第二日 (一〇月五日) **大型計算機センター助教授** 大西 淳

漢字コードの問題點とISO10646UCS 電子フォント作成法(講義) 勝村 哲也

學術情報センター教授 宮澤

データベースについて (講義) 計算機處理入門―情報化のトレンド― (講義) 大型計算機センター技官 隈元 榮子

> 大型計算機センター助手 川原

データベース検索 (一) (實習)

齊

第三日(一〇月六日)

知識情報處理(講義)

寬

マルチメディアと言語處理(講義 大型計算機センター助手 石橋 勇人

國立民族學博物館助教授 久保 正敏

データベース檢索 (二) (實習)

第四日 (一〇月七日)

UNIXと情報檢索(講義)

情報ネットワーク(講義) 大型計算機センター助手 安岡 孝一

データベース檢索(三)(實習) 大型計算機センター助教授 正憲

第五日 (一〇月八日)

漢字コードの話―漢字と外字の處理― (講義)

大學閒ネットワークの狀況について(講義) 大型計算機センター技官 櫻井 恆正 大型計算機センター技官 小澤 義明

一九九三年度漢籍擔當職員講習會(初級)

第一日 (一一月八日) 漢籍の話 (講演)

慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫

第二日 (一一月九日) 四部分類等(講義)京大名譽教授 教授 清水 尾崎 茂 康

目錄法 (講義) 經部書(講義)

田中

史雄 久子

第三日(一一月一〇日

史部書 (講義)

實習(一)

淺原 達郎

稔 第四日 (一一月一一日)

子・集部(講義)

滋賀大學教育學部助教授

第五日(一一月一二日) 實習 (二)

實習 (三) 新學部 (講義)

時彦

所 員 靜

一日附)、京都大學名譽教授の稱號を授與 (四 (東方部)教授は、停年退官 (三月三

。阪上 孝 (西洋部) 教授を當研究所所長及び附 九九五年三月三一日) 屬東洋學文獻センター長に倂任(四月一日~一

。山田慶兒國際日本文化研究センター教授は、倂 日~一九九四年三月三一日) 任教授(西洋部)。(比較文化研究部門、四月一

。岸本美緒東京大學助教授は、併任助教授(東方 年三月三一日) 部)。(比較文化研究部門、四月一日~一九九四

〜礪波 護(東方部)教授は、文學部教授に配置 九四年三月三一日) 換(四月一日附)、倂任教授(四月一日~一九

字佐美齊(西洋部)助教授は、教授に昇任。

。藤井正人大阪大學文學部助手は、當研究所助教 授(西洋部)に昇任。

。矢木 毅氏を助手(東方部)に採用。

上野成利氏を助手(西洋部)に採用 (以上四月

水野直樹助教授(日本部)は、一九九二年八月

井波

陵一

ジア關係史に關する研究及び研究資料蒐集を行 ド=エンチン研究所に於いて朝鮮近代史、東ア ○日伊丹發、スタンフォード大學、ハーバー 九月七日歸國。

齊藤希史助手(日本部)は、一九九二年八月二 に關する研修及び研究資料蒐集を行い、八月一 八日伊丹發、北京大學に於いて中國文學理論史

建築調査及び研究資料蒐集を行い、一月一七日 客家土樓、姑嫂塔、開元寺等に於いて中國の古 表のための打ち合わせを行い、一月一〇日歸國。 蒐集、マンチェスター大學に於いて研究論文發 サンドリオ周邊での民族學的調査及び研究資料 二三日成田發、ミラノ大學に於いてイタリア・ 淡助教授(東方部)は、一月八日伊丹發、 泰教授(西洋部)は、一九九二年一二月

究資料蒐集を行い、三月三一日歸國。 學術國際研究討論會出席及び東林黨に關する研 寧波大學、上海圖書館に於いて一九九三年淅東 小野和子教授(東方部)は、三月一九日伊丹發、

佐々木博光助手(西洋部)は、文部省在外研究 識の形成過程に關する研究を行い、一九九四年 員旅費により、三月二五日成田發、マックス= プランク研究所に於いてドイツにおける種族意 一月二四日歸國。

田中雅一助教授(西洋部)は、 水産省に於いて漁村の調査及び調査報告を行 い、四月二九日歸國。 **負擔により、四月八日伊丹發、ゴール、コロンボ** 國際協力事業團

横山俊夫助教授(日本部)は、 チュービンゲン大學日本文化研究所に於い 五月三〇日伊丹

て「日本の禮法」に關する講義を行い、七月四

前川和也教授(西洋部)は、文部省國際研究集 會派遣研究員旅費及び人文科學研究協會負擔に 究調査及び研究資料蒐集を行い、七月二四日歸 告、大英博物館に於いてシュメール學に關する研 てシュメール農業研究グループ集會出席・報 より、六月三○日伊丹發、ライデン大學に於い

。桑山正進教授(東方部)は、七月四日伊丹發、 七月一四日歸國。 ガンダーラ彫刻に闘する研究資料蒐集を行い、 席、ヴィクトリア・アルバート博物館に於いて ア考古學者ヨーロッパ協會第一二囘國際集會出 ヘルシンキ大學ボルタニア校舍に於いて南アジ

を行い、八月一九日歸國。 ター、パリ高等研究院、ミラノ大學に於いて人 フランス社會科學高等研究院歷史研究セン ・家畜閒關係についての文獻資料蒐集及び調査 泰教授(西洋部)は、七月一八日伊丹發

。田中 淡助教授 (東方部) は、委任經理金によ 。小南一郎教授(東方部)は、九月二日伊丹發、 中國社會科學院文學研究所に於いて一九九三年 四囘アジア北アフリカ國際會議出席及び食物史 り、八月二二日伊丹發、香港大學に於いて第三 中國古代小説研討會にて論文發表を行い、九月 に關する研究資料蒐集を行い、八月二八日歸國。 一二日歸國。

・曾布川 寛助教授(東方部)は、九月四日伊丹 際學術討論會出席及び中國美術に關する研究資 發、龍門石窟研究所、陝西省歷史博物館、兵馬 俑坑博物館等に於いて龍門石窟一五○○周年國

。稻葉 穰助手 (東方部) は、一一月五日成田發 スワート、ペシャーワル大學、タキシラ遺跡等 ラム時代に關する寫本調査を行い、一一月一一 に於いて、佛教寺院遺跡調査ならびに初期イス

。田中雅一助教授(西洋部)は、委任經理金によ り、一一月六日伊丹發、マドラス大學、タミル の供物の人類學的研究を行い、一二月一六日歸 大學、デリー大學に於いて寺院儀禮と家庭祭祀

横山俊夫助教授(日本部)は、一一月一四日伊 ン萬博に關する資料調査及び學術情報交換を行 テナウ國民大學校等に於いて一八七三年ウィー 丹發、ウィーン大學、國立工藝美術館、ブリギッ い、一一月二三日歸國。

狹閒直樹教授(東方部)は、一一月二二日伊丹 發、廣東大厦ホテル、新會學術會議場、 術會議場に於いて「戊戌后康有爲梁啓超與維新派 南海學

料蒐集を行い、九月二四日歸國

。横手 補助金により、 調査及び研究資料蒐集を行い、一一月一一日歸 杭州抱朴道院、金華山等に於いて道教に關する 裕助手(東方部)は、文部省科學研究費 九月九日成田發、上海白雲觀、

荒牧典俊教授(東方部)は、九月二九日伊丹發 教の貢獻」シンポジウムに出席し、一〇月八日歸 インド國際センターに於いて「環境問題及び佛

。桑山正進教授(東方部)は、一〇月二二日成田 教寺院出土のガンダーラ遺物及びガンダーラ佛教 **發、パキスタン北部、スワート地方における佛** に關する資料蒐集を行い、一一月一九日歸國。

齋藤希史助手(日本部)は、一一月二一日伊丹 中國近代文學に關する研究資料蒐集を行い、一 國際學術研討會に參加、香港中文大學に於いて 術會議場に於いて「戊戌后康有爲梁啓超與維新派_ 國際學術研討會に參加し、一一月二七日歸國。 二月一日歸國。 廣東大厦ホテル、新會學術會議場、南海學

丹發、北京大學、 高田時雄助教授(東方部)は、一一月二四日伊 いて新疆出土冩本に關する研究資料蒐集を行 い、一二月二四日歸國。 新疆ウィグル自治區文物處にお

外國人共同研究員

 Jean Antoine Bellemin-Noë. の研究(比較社會客員部門) 精神分析批評の諸問題(文學テクストと無意識) パリ第八大學教授

受入教官 大浦助教授

Klaus Kracht 期閒 二月一日~七月三一日

チュービンゲン大學教授、日本文化研究所所長 九世紀日本の禮法の社會史的研究(日本學客

八月一七日~一九九四年四月一六日 受入教官 橫山助教授

 Marianne Bastid=Bruguière 師範學校副學長 フランス國立科學センター研究主任、パリ高等

近代中國文化の諸相の研究(比較社會客員部門)

九月一日~一九九四年二月二八日 受入教官 狹閒教授

中國近代文化交流史の研究 映芳 華東政法學院大學講師

。Timothy Barrett ロンドン大學教授 期閒 四月一日~一九九四年三月三一日 受入教官 狹閒教授

二世紀~一〇世紀中國における宗教・國家と社

受入教官 礪波教授

。嚴 期閒 中國疫病流行とその社會的文化的連關 善炤 福建省中醫學院講師

四月一日~一九九四年三月三一日

期閒

。 田 六朝貴族制社會 餘慶 北京大學歷史系教授

四月一六日~七月一四日 吉川教授

。Janine A. Sawada グリネルカレッジ助教授 期閒 今北洪川を中心に― | 九世紀日本における宗教生活に關する研究-

。Silvio Vita ナポリ東洋大學助教授 六月一五日~一九九四年六月一四日 受入教官 横山助教授

期閒

唐宋佛教典籍史研究

。Joshua Fogel カリフォルニア大學教授 期閒 清末のマスメディアについての研究 七月一日~九月三〇日 受入教官 桑山教授

期閒 七月九日~一〇月八日 受入教官

狹閒教授

。Joan Judge ユタ大學助教授

四月一日~八月七日

受入教官 麥谷助教授

受入教官

初期道教の鍊丹實修

期閒 九月一四日~一九九四年八月三一日 受入教官 麥谷助教授

外國人研究生

。Lowell Dean Skar ペンシルバニア大學博士課

中國科學と宗教の關係

四月一日~九月三〇日 受入教官 田中淡助教授

Sabine Maria Fruhstuck ウィーン大學博士課

期閒

七月九日~一〇月八日 受入教官 狹閒教授

。Gotelind Müller ミュンヘン大學東方研究所研

中國、 日本におけるアナーキズム

期閒 九月一七日~一九九四年三月一一日 受入教官 狹閒教授

神道儀禮と中國道教儀禮の比較研究 耀庭 上海社會科學院宗教研究所副研究員

一〇月四日~一九九四年六月三〇日 受入教官 麥谷助教授

期閒

外國人研修員

。Fabrizio Pregadio イタリア東洋學研究所研究

「周易參同契」の文獻的教義的傳統 受入教官

期閒 二月一日~一九九四年六月三〇日 吉川教授

志添 香港中文大學助手

日本人の身體理解と身體管理	-	歐文紀要 ZINBVN 第二七號	
受入教官 富永助教授	道教文學	一九九三年三月三一日刋	
帮問 四月一日~一九九四年三月三一日	受入教官 麥谷助教授	東洋學文獻類目 一九九〇年	
外 紅 福建師範大學講師	期閒 五月一日~一九九四年四月三〇日	一九九三年三月三一日刋	
9清婦女問題 (。Abigail Schweber ハーバード大學博士課程學		
受入教官 小野教授	生	研究報告その他	-
帮閒 四月一日~一九九四年三月三一日	政治的社會化に關する研究	法的思考の研究	屮
ames George Robson カリフォルニア大學博	受入教官 山室助教授	一九九三年三月三一日刋	
上課程學生	期閒.一〇月一日~一九九四年三月三一日	「滿州國」の研究	山本
〒國思想史における南嶽衡山の研究		一九九三年三月三一日刋	
受入教官 荒牧教授	出版 物	中國近世の法制と社會	梅原
閒 四月一日~一九九四年三月三一日		一九九三年三月三一日刋	
Monika Elisabeth Kure チュービンゲン大學	紀要	中國中世の文物	礪波
日士課程學生	人文學報 第七二號 (紀要第一二〇册)	一九九三年三月三一日刋	
受入教官 横山助教授	一九九三年三月三一日刋	所報「人文」第三九號	
閣 四月一日~一九九四年三月三一日	東方學報(第六五號(紀要第一二一册)	一九九三年三月三一日刋	
ranco Gatti ナポリ東洋大學研究プロジェク	一九九三年三月三一日刋		